こころの健康

統合失調症について
（その５・病跡学の視点）

千葉県医師会　根本（ねもと） 豊實（とよみ） 医師

芸術家や学者などの著名人の人生を、精神医学的な側面から掘り下げ、その創造や作品の特徴を精神の病の原因や症状と関連させて考察する学問が「病跡学」であり、精神医学の応用分野の一角をなしています。

病跡学の大きな特色として、著明な人物の業績が、精神の病にも“かかわらず”ではなく、その病“ゆえに”達成されたとする方向で考察する傾向が強いことがあります。 そして「病跡学」は、昔からしばしば統合失調症をその対象としてきました。

実際に、詩人のヘルダーリンや数学者のカントールや舞踏家のアルトーなど、後年明らかに統合失調症を発病し、後に入院などの治療を受けた人は少なくありません。 このうち、テュービンゲン大学医学部精神科に入院後に塔の中の部屋で後半生を送ったヘルダーリンは、発病直前の時期にも作品を残しております。 それを読むと、いくら言語化しても言い尽くすことができないような（論理的に成り立たない異様な体験のあり様）、生々しさに圧倒されます。 そしてそこには、統合失調症の支離滅裂な世界にあと一歩まで近づいた、両価性に引き裂かれる思考の乱れが垣間見られます。 ヘルダーリンの世界に興味がある人は、例えば木村敏氏の「生命のかたち / かたちの生命」（青土社）118 項以下を参照してください。

このように明らかに発病した人以外でも、統合失調症に気質的に近い傾向のある著名人は少なくなくて、例えば、哲学者のヴィトゲンシュタインや物理学者のニュートン、作家の芥川龍之介などがおります。 その思考パターンの特徴は直感的で、ある意味で神秘的ですらあり、常識や古い仕来りにとらわれず、それまで誰も考えたことのないような新しい世界を切り開きます。

統合失調症に気質的に近い傾向のある著名人は、哲学者や物理学者や数学者や詩人などに多く、その業績の特徴は、様々な種類の違ったものがある複雑な世界に通用する簡単な原理を取り出して「その複雑な世界をたった一行でまとめる」ということになるでしょう。
ニュートンも含めた科学者の病跡学研究の名著に「天才の精神病理」（飯田・中井著、岩波現代文庫）がありますので、できれば参照してください。

次回は、統合失調症の病理を発達障害と比較しながら明らかにしたいと思います。

両価性：ある事に対して相反する感情が同時に存在する状態。 例えば、愛情を感じる一方で憎しみも抱く、など。
病　理：病気の原因や過程に関する論理的な根拠。
ヴィトゲンシュタイン：ルートヴィヒ・ヴィトゲンシュタイン（1889-1951）オーストラリアに生まれ、イギリスで活躍した哲学者。
ヘルダーリン：ヨハン・クリスティアン・フリードリヒ・ヘルダーリン（1770―1843）ドイツの詩人、思想家。
カントール：ゲオルク・フェルディナント・ルートヴィッヒ・フィリップ・カントール（1845―1918）ロシアのサンクトペテルブルク生まれのドイツで活躍した数学者。
アルトー：アントナン・アルトー（1896―1948）マルセイユ生まれのフランスの俳優・詩人・小説家・演劇家。